

2021/05/09

ヨハネの福音書 講解メッセージ④⑨

『罪とは何、義とは何、裁きとは何?』ヨハネ 16:5-11

■助け主の働き

「しかし今わたしは、わたしを遣わした方のもとに行こうとしています。しかし、あなたがたのうちには、ひとりとして、どこに行くのですかと尋ねる者がありません。かえって、わたしがこれらのことをあなたがたに話したために、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。」(ヨハネ 16:5-6)

イエス様が十字架に架かる前の言葉を聞いた弟子たちは、誰もイエス様のことばを受け入れることができず、悲しみでいっぱいでした。私たちがイエス様の言葉を信じるのが、いかに難しいかがわかります。イエス様が救い主であることを信じられても、すべての言葉を信じることは、なかなかできません。「すべての問題は解決される」「求めるなら何でも与えられる」などと言われても、多くの方は現実を見るとあきらめてしまいます。

そこでイエス様は弟子たちに、助け主を送る約束を思い起こさせてくださいました。

「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところへ遣わします。」(ヨハネ 16:7)

なぜイエス様が去ることが、私たちにとって益なのでしょう。それは、イエス様が見えると、イエス様を目で確認しようとしてしまい、信仰によって知ろうとしなくなるからです。神様は、理性で納得しようとするのではなく、信仰を使って神の言葉の真実を確認してほしいと願っておられます。理性で神を確認しようすると、必ずつまずきが起こります。しかし、霊のからだを着せられた私たちは、助け主である聖霊様の働きによって、神の言葉は真実だと信仰で確認することができるのです。

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」(ヨハネ 16:8)

理性を通して理解できる罪は、道徳的な行いの罪です。ですから、この世界では一般的に、「罪とは悪い行いであって、義とはほめられるような良い行いをすることであって、さばきとは罪を犯したらさばかれるということ」と考えられています。しかし、それは誤りなのです。

しかし、見えるもので確認しようとする限り、これが誤りであるとは理解できません。それを聖霊様が教えてくださるのです。ですから、イエス様が離れていくことは益になるのです。

■人の誤りとは

「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」(ヨハネ 16:9 新改訳)

この箇所は、「罪とは私を信じないことです」と訳すべきです(新共同訳聖書はそのように訳しています。)つまり、罪とは悪い行いのことではなく、神を信じないことなのです。これが人の誤りです。神を信じられないから、結果として悪い行いに向かうのです。罪の状態にあるから、罪の行いを犯すということです。

なぜ人は神を信じられない状態になったのでしょうか。

■なぜ神を信じられないのか

「神である主は、その大地のちりて人を形造り(「体」を造り)、その鼻にいのちの息(霊)を吹き込まれた(「魂」と呼ばれている)。それで人は生きるものとなった(何かを意識する「精神」が機能するようになった)。(創世記 2:7 ※()は意味を補足)

人は、神のいのちを土台にして造られました。神のいのちは神の思いを発信し続け、体が大地の情報を持ち込み、二つの異なる情報が交わるところに意識が生じます。神という土台があるから、人はものを考え、意識することができるのです。

つまり、私たちの存在を支えているのは神です。人間は単独で存在しているのではなく、神のいのちがなければ存在できません。

人の本質は精神です。精神は、神のいのちという土台と、大地のちりから造られた体によって成り立っています。

すべての人の中に神の思いがあるため、人間は皆良心というものを持っています。この神の思いを確認するために造られたのが体です。私たちの体は、この世の情報を収集し、神の思いを確認するために造られたのです。

神の思いは、皆を結び付け、すべてを統一させようとします。その結果、集めてきた情報に争いが見つかり、平定や和解に向かわせようとする意識が働きます。「言葉」というものが生まれたのも、物事に共通性を見つけて仲間同士をまとめて呼び名を統一したことによります。「初めにことばがあった」とありますが、ことばの概念は、神の思いを体によって確認することで生じたわけです。

ということは、私たちが何を意識するかは体が集める情報に左右されるということです。人に罪が入る前、私たちの体は永遠性で、神の思いを確認することができました。また、世界はすべて平和で統一されていて、神のいのちに養われていました。

たとえば、アダムもエバもお互いに裸であることを恥ずかしいとは思わなかったとありますが、それは、神の愛を確認できる体を持っていたからです。神の愛は、無条件に人を受け入れます。神の愛を確認できる体を持っていたので、人は自分が無条件で愛されていることを知っており、恥ずかしいという思いがなかったのです。つまり、自分自身を否定する思いがなかったということです。

「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。」

(創世記 2:25)

ところが蛇が悪魔に操られてアダムとエバを欺いて罪を犯させ、死が入り込み、世界は一変しました。

罪を犯すとは、神と異なる思いを持つことです。神と異なる思いを持ったことで、神との関りが崩壊し、永遠性から有限性が変わって、神が見えなくなりました。これが死です。多くの人は、罪を犯したから神が罰として死を与えたと思っていますが、そうではありません。罪を犯すと有限性（死）が入り込み、死ぬものになってしまうのです。だから神様はアダムに、食べると死ぬと言われたのです。

悪魔の仕業によって死が入り込んだ結果、人は罪を犯すようになりました。なぜなら、罪は死が原因で生じるものだからです。それで、聖書は「罪を犯す者は、悪魔から生まれている」と言っているのです。

また、死が入り込んだ結果、人は神の思いを確認できなくなりました。有限性の世界では永遠性が確認できないからです。

永遠なる神との関わりが崩壊した私たちの世界は、制約を受けた世界です。「無限」という理論を知ってはいるのですが、この世界ではそれを確認できません。宇宙の始まりのことも、神の始まりのことも、私たちにはわかりません。制約された者が制約されていない方を知ることが不可能なのです。これが有限性です。

今もあなたの土台は神であって、神は、神の思いを今も発信し続け、私たちは神に支えられ、永遠性を知っているのですが、体ではそれを確認できません。それで、神の言葉が信じられないということになるのです。罪とは、神のことばが信じられないことです。人が神のことばを信じられなくなってしまったすべての原因は、死が入ったことによるのです。

■神の福音

私たちは永遠性を知りながら、有限性しか確認できないという状態にあります。そのため不安が生じます。そしてその不安から見える安心を求めて罪の行為に走ってしまいます。

また、永遠性が確認できなくなった私たちは、永遠性ではない自分自身を否定して見るようになりましたが、それを隠そうとして生きています。なぜなら、本来の自分は永遠性であり愛される存在であることを知っているからです。

今日の私たちは、誰もが自分の姿を否定し、恥ずかしいと思って生きているため、何かで覆い隠して、良く見せようとして生きています。しかし、私たちが自分を隠そうとする道具は、すべてこの世のもので、いつかは消えてなくなるものです。つまり、否定の上に否定を塗っているのです。このことの始まりが、次のように記されています。死が入り込んだ直後のことです。

「このようにして、二人の目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」(創世記 3:7)

自分の中に否定が入ったことを知った人間は、自分を良く見せようとして生きるようになりました。これが今日の私たちの生き方の原型です。

私たちは、永遠性と有限性、つまり、いのちと死の両方を抱えてしまったため、その矛盾から不安が生じて、何か程度のいいもので自分を飾り、自分を隠そうとして生きるようになりました。少しでもうわべを良くするために、人と比較し、嫉妬し、落ち込み、高ぶり、これらを繰り返して生きています。それが不道德な行為を生み出しているのです。

このように、人が神を信じられない(罪)のは、有限性(死)が入り込んだためです。次のように書いてあります。

「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」(ローマ 5:12 私訳)

罪とは、神が信じられないことであり、罪の状態に陥ったことで、人は、罪の行為を犯すようになりました。「罪の報酬は死である」と聖書にありますが、それは、神を信じられない状態に陥ったことによって、自動的に死が入り込んだということです。これが罪と死の原理です。神と異なる思いを持つことで、自動的に神との関係が壊れ、永遠性から有限性になるという原理のことなのです。

こうして、この世界は死の世界になり、永遠性を確認できなくなりました。そのことで私たちは不安を覚え、すべての人が罪を犯すようになったのです。

余談になりますが、このローマ 5 章 12 節について、既存の聖書はすべて、「その結果」と訳すべきところを、「なぜなら」と訳しています。つまり、「すべての人が罪を犯したから、すべての人に死が広がった」という理解です。これはギリシャ語「エピ ホー (エポー)」をどのように訳したかによる違いですが、この訳に疑問を抱いたフィッツマイヤーという聖書

学者の研究によって、これは誤訳であることが明らかになりました。最新のギリシャ語辞典はすでに書き換えられています。すなわち、今後は、「その結果」と訳すのが正解です。

つまり、聖書は一貫して、死が入り込んだことで罪を犯すようになったと教えているのです。死は神の罰ではなく、私たちがアダムにあって罪を犯したわけでもありません。悪魔の仕業によってアダムが罪を犯した結果、世界は今のようになったのです。

■永遠のいのちを得た者が信じるようになる

罪とは、有限性が入った死の状態を指します。これは、よそから入ってきた病気であって、あなたのせいではありません。この有限性の体では、神の思いを確認できません。そこで、確認するための霊の体が必要になります。これが、永遠のいのちです。霊のからだである永遠のいのちを与えられると、イエス様を信じるができるようになるのです。

「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」

(ローマ 5:21)

「罪が死によって支配した」とは、死が入り込んだことで、罪が私たちを支配するようになったということです。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えています。」(ローマ 7:24-25)

罪から救い出されるとは、死の体から救い出されることです。私たちがイエス様を信じられるようになったのは、永遠のいのちを持ったからです。すでに私たちは死からいのちに移されているのです。肉では罪の律法に仕えています、これは消えてなくなるものです。だから、感謝するのです。

私たちはすでに死からいのちに移されています。しかし、この地上にいる間は、両方持っているため、まだ肉の律法にも仕える自分が残っていますが、もう滅びることはありません。

「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」(ローマ 8:1-2)

神の福音とは、罪という病をいやし、私たちをもとの永遠性の体に戻して、天に引き上げることです。「救い」を意味する「ソーズー」というギリシャ語は、もともと「いやす」という意味です。神は私たちをいやすために来られたのです。

見えるところは死の体を持っていても、私たちは神のいのちによって造られたものであり、神様があなたの存在を肯定しておられるのですから、さばかれることはありません。

人は、肉の体が滅びると、神のいのちは神に返却され、意識ができなくなります。神は、その前に、霊のからだを着せて永遠のいのちを与えたいと願って、24時間呼びかけ続けておられます。神の呼びかけに応答することなしに、霊のからだは与えられません。そして、霊のからだを着せられると、イエス様を信じられるようになります。

私たちの土台が神のいのちであるため、神は私たちを見捨てることができません。「私のものはすべてお前のものだ」と言って、神のものをすべて与え、私たちの苦しみをすべて引き受けて、十字架にかかれたのです。あなたがどんな状態であっても、神に背負われ、引き受けてもらっている事実は変わりません。それほど、神はあなたを愛しておられます。そのことを受け入れる勇気を持つのが信仰です。これを受け入れることができれば平安になります。私たちが自分を否定するのは、有限性に惑わされているからです。「こんな自分はダメだ」と、自分を否定すると、神の愛が神の裁きに見えてしまうのです。

■義とさばきについて

「また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」(ヨハネ 16:10-11)

義とは、良い行いによって神に認められることではなく、神があなたを義としておられることを受け取ることです。イエス様が見えなくなったら、行いを見てもらおうとしてもできなくなるので、神の義は信仰によって受け取るしかなくなります。

また、「さばく」とは、本来「分ける」という意味です。イエス様は、私たちをこの世を支配するやみと分離します。そのためには、私たちは、自分がやみの中にいることを知らなければなりません。イエス様は、まずやみを教えるために、光を明らかにしました。

「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:4-5)

神様のさばきの対象は、人ではなく、この世を支配する死です。私たちを死からいのちに移すことが、神のさばきなのです。ですから、それは、人間に対してはいやしであり、死や悪魔に対しては滅びです。

私たちが神のさばきを恐れるのは、自分を否定するからです。しかし、神は、あなたは良きものだと言いつけておられます。このことを受け入れるには、理性を飛び出して、信仰で神を見なければなりません。

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」

(I ペテロ 2:24-25)

神はあなたをいやしたいと切実に願っておられます。なぜならあなたは神を土台に造られたからです。神はあなたを見捨てることはなく、いつも共におられます。あなたは一人で存在しているわけではありません。あなたは神に受容され、愛されています。これは、肉の体を通してでは理解できません。霊のからだを通して、聖書の言葉を素直に信じることによって、私たちは平安の義の実を結ぶことができるのです。